

越境ある学びをつくるカリキュラム・デザイン —「光輝（かがやき）」の実践研究を通して—

広島大学附属三原中学校・小学校・幼稚園
中村 勝・森 清成・広兼 睦

Curriculum Design for Cross-boundary Learning:
Through the Practical Study of “KAGAYAKI”

Hiroshima University Junior High School, Primary School and Kindergarten, Mihara
Masaru Nakamura, Kiyonari Mori and Mutsumi Hirokane

Abstract: The purpose of this research is to develop the abilities required to adapt to a highly competitive and globalized diverse society. The educational curriculum for this purpose has been organized into three dimensions. The three dimensions are dynamic sensitivity, resilience, and cross-sectional knowledge. By organizing the curriculum around the abilities that make up the three dimensions, it is possible to transcend the boundaries of disciplines and subjects. In addition, we aim to develop abilities through a 12-year integrated curriculum that transcends the types of schools, kindergarten, elementary and junior high schools.

Key words : Cross-boundary Learning, Curriculum design, Dynamic sensitivity, Resilience, Boundary-crossing of knowledge

1 研究の概要

本学校園は、平成30年より文部科学省研究開発学校指定校として、5年間新領域「光輝（かがやき）」（以下「光輝」という）を中心とした、幼小中一貫教育カリキュラムの開発を行った。幼稚園では「光輝視点の保育」、小・中学校では、道徳・特別活動・総合的な学習の時間の全時数と各教科時数の4分の1程度を上限に含んだ新領域「光輝」に、メタ学習理論やブレイクスルー思考を取り入れた単元を開発した。保育・各教科とも関連させ、3つの次元（躍動する感性・レジリエンス・横断的な知識）の基礎となる7つの資質・能力を育成する授業の開発・実践を行い、12年間の一貫教育カリキュラムのデザインを行った。

この研究の特徴は、3つの次元を枠組みとした幼小中一貫教育カリキュラムの開発と、7つの資質・能力を育成するための方略を整理したことである。特に、本稿のテーマである「越境」に関連して、「知の越境」、「教科・領域の越境」、「校種間の越境」、「教員間の越境」、「保護者・地域への越境」に焦点を当てながら、取組の実際とその効果について論じていくこととする。「越境」とは、個人にとってのホームとアウェイの間にある境界を越えることと定義する（石山・伊達, 2022）。さらに、「越境学習」（石山・伊達, 2022）は、ホームからアウェイへと往還することで生まれる違和感、葛藤が、学習効果をもたらすとされている。

本校の「光輝」と「光輝視点の保育」によって、様々な越境が生まれ、その越境によるレジリエンスによって、感性を躍動させたり、知識を横断させることが可能となると考えた。

2 研究の目的と経緯と方法

（1）研究の目的

高度に競争的でグローバル化された多様性社会に適応するために求められる、3つの次元（躍動する感性・レジリエンス・横断的な知識）の基礎となる7つの資質・能力を育成することである。さらに、7つの資質・能力を育成するための幼小中一貫教育カリキュラムを開発し、実践し提言として報告することを目的としている。

（2）研究の経緯

研究に至る経緯としては、社会の現状と本学校園の子供たちの姿を照らし合わせた時、いくつかの課題が明らかとなった。研究課題の設定当初、幼稚園の場合、“やってみよう”と思った遊びをやってみようとするが上手いかなかったり、遊びを進める中で一緒に取り組む友達と通じ合えなかったりすると、相手に任せてしまったり、すぐに諦めたりする姿が見られた。また、小中学校の場合、前例がないことに取り組む時や活動の見通しがもてない時は、二の足を踏み、既存の枠から飛び出して行くことができず、飛び出したとしても自分たちの力で対応することができないという姿が見られた。つまり、「越境」への恐怖心や不安感が強くみられたのである。先述した「越境学習」では、ホームからアウェイへと往還することで生まれる違和感、葛藤が、学習効果をもたらすのだが、その越境しようとする姿を見守ったり、その先で違和感や葛藤を乗り越えたりすることを意図的にカリキュラムの中に取り入れて、単元を構成していく工夫が必要であると考えた。そのような越境を意識した12年間一貫教育カリキュラムを作成するこ

ととした。

(3) 研究の方法

①ブレックスルー思考とメタ学習による「横断的な知識」の次元の獲得

このような本学校園の子供たちの課題を克服していくための方法として、ブレックスルー思考と振り返りを重視したメタ学習を系統的に取り入れたカリキュラムをデザインした。ブレックスルー思考とは、専門性のあるもの同士の協働的問題解決によって、柔軟な発想で新しい考え方の着想を得たり、既存のものや前例のあるものをもとにしながら、0から1を生み出したり、1から10に広げたりする思考法である。また、メタ学習とは、学び方を学んだり、自分の獲得した力を俯瞰的に見つめたりするための振り返りを重視する学習方法である。それにより、知識と知識のつながりが生まれ、「横断的な知識（汎用性のある知識）」を獲得することが期待できる。「横断的な知識」を獲得すれば、必要な知識の獲得や技能の習得をより汎用性の高い実践知とつなげていくことができる。これにより、既知から未知への「知の越境」が可能となる。

②協働的学習や複眼的思考力の育成による「レジリエンス」の次元の獲得

そのような中で、子供たちは必ず、うまくいかないこと・困難なことに遭遇する。その際に、粘り強く取り組む姿勢や仲間とともに協力しながら乗り越えようとする姿勢、複眼的にもものごとを見る力が必要である。このような力を「レジリエンス」と定義し、困難を乗り越えるための能力とした。特に、このレジリエンスは、「越境学習」に欠かせない要素となっている。

③子供の思いや願いを基盤とした活動やひと・もの・こととのあいでの設定による「躍動する感性」の次元の獲得

私たちが学びを駆動させるものは、感情である。感情が揺れ動くことによって、私たちの学びは確かなものになる。つまり、感情を伴って価値あるものに気付く感覚と、その感覚を求めてさらに知りたい、学びたいという感情が自らをつき動かすのである。そのような感情を引き出す手立てとして一人一人の思いや願いを大切に活動の設定を行ったり、ひと・こと・ものへのあいをコーディネートしたりすることによって、感情が揺れ動く。そのような感情の揺れ動きを重ねることによって、豊かな感性を引き出すことができる。このような感情を突き動かしながら学ぼうとする「躍動する感性」が私たちは重要であると考えた。

④3つの次元を意識した環境設定

そこで、「躍動する感性」、「レジリエンス」、「横断的な知識」の3つの次元を、学びをデザインするための枠組みとして、子供を見取ったり、環境の設定を行ったりすることとした。また、多様性社会を生き抜くために必要な7つの資質・能力を整理し、発達段階に基づいて目指す姿を12年間一貫教育の中で系統的に育てるための資質・能力系統表を作成した。その資質・能力系統表をもとにしながら、12年間一貫教育カリキュラムをデザインし、実践したこと

の効果を検証する。

3 光輝（かがやき）の研究内容

(1) 教育課程の内容

3つの次元とその基礎となる7つの資質・能力（表1）について、年少児から9年生（中学3年生）までの12年間を整理し、資質・能力系統表としてまとめた（別紙資料参照）。その資質・能力系統表を基にして、7つの資質・能力の育成をめざして、活動や授業を行った。

表1 3つの次元と7つの資質・能力

3つの次元	躍動する感性	レジリエンス	横断的な知識
資質・能力	人間味溢れる豊かな感覚	粘り強く取り組む力	知識と知識を関連付けながら深く追究する力
	自ら学ぼうとする姿勢	コラボレーションする力	論理的に問題を解決する力
		複眼的に思考する力	

(2) 新領域「光輝」及び「光輝視点の保育」の活動の実施と単元開発・カリキュラム開発

①幼小中の「発達と接続」を意識した学年区分の設置

図1のように、12年間における幼小中の接続を意識した接続区分「幼小接続期（年少～2年）、転換期（3・4年生）、小中接続期（5～7年）、義務教育完成期（8・9年）」を設置した。新領域「光輝」及び「光輝視点の保育」と「保育・各教科」にまたがる「教育活動全般のカリキュラムの開発」を行った。

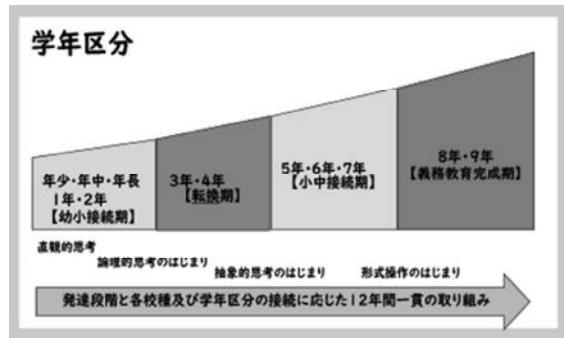


図1 4つの学年区分と発達特徴

②新領域「光輝」の単元開発・カリキュラム開発

表2 今年度（2023年度）の活動名及び単元名

活動名・単元名	学年
・3匹のこぶたごっこ遊び	3歳児
・虫探し	4歳児
・上り棒遊び	
・お化け屋敷迷路づくり	5歳児
・かえるのかえちゃんを育てたい	
・アイドルコンサートごっこ	1年生
・ペアさんとなかよくなりたいたい	2年生
・学校を楽しくしよう	3年生
・学校ピカピカ掃除大作戦	4年生
・ペアさんを笑顔にしよう	5年生
・1・5◎交流でみんな笑顔に	6年生
・みんなのためにプラスONEプロジェクト	7年生
・三原の町の課題を解決しよう	8年生
・企業研究	9年生
・個人課題を探究して、研究論文を書こう	

新領域「光輝」の単元開発・カリキュラム開発とともに、今年度は主に前項の表2にある活動及び単元開発を行い、実施した。実施していく際には、12年間の「発達と接続」を意識したカリキュラムの体系化をめざし、光輝プログラムと光輝実践記録を作成し、これらを用いて道徳・特別活動や各教科をどのように位置付けているのかを把握できるようにし、取り組んだ。

③「光輝視点の保育」の活動の実施と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に視点をあてた資質・能力を育む三原版幼小接続カリキュラムの開発

三原版幼小接続カリキュラムを開発した(図2)。開発を続けていく中で、活動でつなげるのではなく、教員のかかわりでカリキュラムをつないでいくこと(校種間の越境)及び「教員間の越境」が汎用性の高いカリキュラムにつながるのだと明らかとなった。

4 本年度の主な研究の取組と成果

本年度の研究の取組から、次の5点の成果が明らかとなった。「越境」と関連付けながら説明する。

(1) 知の越境

子供への効果を明らかにするために、幼稚園では、保護者への子供の育ちのエピソード記述、保育者のエピソード記録と保育者コンファレンスから効果の検証を行った。

小・中学校では、光輝アンケートを1年生から9年生に4月と10月に行った。量的評価だけでなく、授業等の子供変容もエピソードとして記録し、効果を検証した。光輝アンケートの項目については表3のようになっている。

特に、4月から10月のアンケート結果において顕著な高まりがあった項目について紹介する。「4 自分の考えに間違いがないかを確認しながら考えようとしている。」は、75.9%→90.7%(+15.8)であった。「8 嫌なことや、つらいことも乗り越えたいと考えている。」は、86.1%→90.9%(+4.8)であった。「16 学んだことを、学校生活や普段の生活に生かそうとしている。」は、87.1%→89.8%(+2.7)であった。「19 ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことがある。」は、90.8%→93.1%(+2.3)であった。「21 授業で学んだことを他の学習に生かしている。」は、80.8%→90.0%(+9.2)であった。

一番高まりが大きかった項目である「4 自分の考えに間違いがないかを確認しながら考えようとしている。」は、プロジェクトベースの学びを基盤に学習活動を行う中で、失敗を経験しそれによって、生じる他者への影響を実感したことによって、自分の考えを確かめながら活動を行おうとする意識が高まったのではないかと考えられる。また、「16 学んだことを、学校生活や普段の生活に生かそうとしてい

<p>広島大学附属三原小学校 幼小接続カリキュラム</p> <p>～子どもへのまなざしや関わり方を検証する子ども中心のカリキュラム～</p>		<p>私たちは、本カリキュラムに示している子どもの姿や、それらを受け止める教師のまなざしや関わり方を特に大切に、子ども達自身が学びたいという思いや願いを抱き、活動に没頭し、成功や失敗を重ねながら次の学びにつなげていく、その姿こそ、真に学びが深まっている姿であると考えています。</p> <p>86年1月9日現在</p>	
<p>幼小で大切にしていること</p>		<p>〇具体的な子どもの姿</p>	
		<p>⇒教師の姿勢(環境・援助)</p>	
		<p>失敗する ぶつかると 振り返る 成長を実感する</p>	
		<p>実態に合った提示 個々の願いの尊重 待つ 見守る</p>	
<p>育てたい資質・能力</p> <p>キーワード</p>	<p>幼稚園 年長</p>	<p>小学校 1年</p>	
<p>人間関係の豊かさを育むこと</p> <p>人とのつながりや思いやりを育むこと</p> <p>自分自身を大切にすること</p>	<p>心動かす</p> <p>〇興味の湧くこと、心を動かすこと。 ⇒人の感情や態度を尊重し、子ども達が感じる不思議さや面白さに共感する。 〇一人一人が自分の思いや考え方を表現し、それらをお互いに尊重する。 ⇒各自が感じたことや考えたことをみんなの前で表現する機会を保障し、保育者が受け止めるモデルを示すことで、興味の湧くこと、心を動かすことができるようになる。</p>	<p>〇新しい環境に対して、心を動かして主体的にかかわる。 ⇒一方的に教師の考えを押しつけるのではなく、「どんな～があるかな?」「どうして～だろうか?」等の気持ちや疑問を引き出す問いかけを重視する。 〇一人一人が自分の感じたことや考えたことを安心して表現する。 ⇒個々の感じ方や考え方には違いがあることに加え、家庭や幼稚園・保育者での学びや育ちにも多様性がある。教師自身が違いを感じ取り、そのことを受け止める余裕をもって積極的に理解する。</p>	
<p>自ら学ぶ意欲を育むこと</p> <p>学びたい意欲や好奇心を育むこと</p> <p>自ら進んで取り組むこと</p>	<p>意欲(自分から)</p> <p>〇自ら進んで取り組むこと、満足感や達成感を味わう。 ⇒子ども達の思いや願いを理解することにより、達成のための時間や空間、自由を保障し、適切な援助を行う。やりきった満足感や達成感を共に喜び、更なる意欲につながるようにする。 〇生活の自事として、様々な事を経験して決めたこと、責任をもって取り組むこと。 ⇒遊びや活動、園生活の様々なことを教師が決めた予定通りに進めず、子ども達が話し合ったり、自分たちの生活や遊びを決める権利を保障し、その実践を支える。教師任せではなく、自分自身で取り組む経験を積み重ねられるようになり、幼児期の自事意識が身につくようになる。</p>	<p>〇思いや願いを大切にしながら学びをつくり出し、満足感や達成感を味わう。 ⇒子ども達が話し合ったりと思ったことに取り組むことができるよう積極的に援助する。ゆとりをもった生活時間を設定(初めのうちは、チャイムにこだわらない)、子ども達の思いや願いが学習に反映され、達成感が学びへの意欲につながるようになる。 〇自ら進んで取り組むこと。 ⇒生活の中で出てきた問題を「学びのチャンス」として捉え、課題を話し合ったり改善・解決していく時間を保障する。子ども達自身で話し合ったり解決することを見守り、子ども達の思いを十分に引き出し、それぞれの思いをつなげるようにすることで、子ども達自身で問題を解決していくという体験が促されるようになる。</p>	
<p>自ら進んで取り組むこと</p> <p>自ら進んで取り組むこと</p>	<p>自ら進んで取り組むこと</p> <p>〇失敗や挫折しても大丈夫という経験を積む。 ⇒教師が「今のまま受け止める」とことを大事にすることで、子どもの中での安心感や自信が育まれることを援助する。 〇成功体験や挫折を克服する体験をする。 ⇒子ども達の思いや願いを尊重し、それが実現できる援助を行ったり、挫折に寄り添い、共に解決していく援助を行ったりする。</p>	<p>〇できたことに自信をもち、さらなるステップアップを目指す。 ⇒入学当初、集団としてしばらくは、それぞれの思いを共有するにも慣れるつらさや十分できていない時期ということを経験し、今、できていることを認め安心感をもつことができるよう肯定的な評価を大切にすること。 〇困難を乗り越える経験を積む。 ⇒困難を乗り越えたとしてもやり遂げようとする姿を大切に、みんなが共有できるように広げていく。</p>	
<p>コミュニケーション能力を育むこと</p> <p>コミュニケーション能力を育むこと</p>	<p>思いを伝え合うこと</p> <p>〇安心して言葉をぶつけ合ったり、共通のめあてに向かって遊びや生活を共に作り上げていく。 ⇒はたからまきまりを数定するのではなく、子ども同士がぶつかり合える状況をつくって援助を行う。その上で、共に意見を伝え合ったり遊びや生活を共に作り上げていくことができる援助を行う。</p>	<p>〇安心できる人間関係が築かれるように、担任教師との関係づくりを重視する。 ⇒子ども達が安心して言葉をぶつけ合ったり、「大丈夫だよ」「一緒に考えよう」といった言葉とともに、「～したら、安心できそう」というものを共に作り、支援する。「そうだね」「すごいね」など教師の理解をしながら、子供達の思いが引き出されるように配慮し、親の関係を築いていくようにする。 〇見えない友達の良さに触れて、人間関係を少しずつ広げる。 ⇒子ども達の思いや願いを尊重し、それが実現できる援助を行ったり、挫折に寄り添い、共に解決していく援助を行ったりする。</p>	
<p>主体的に思考する能力を育むこと</p> <p>主体的に思考する能力を育むこと</p>	<p>思いを伝え合うこと</p> <p>〇思いや願いの実現に向けて教師の意見を頼ったり、遊びながら友達とやりかたを比べたりすることで、違う考えに気付いたり、自分の中に取り入れたりする。 ⇒自分のこととして関心することができるよう援助したり、他者の意見や考えが伝わったりする援助を行う。</p>	<p>〇生活や学習の中で見つけた課題の実現に向けて、友達や先生や仲間と話し合ったり、よりよい解決へつなげる。 ⇒友達と一緒に進んだり生活をつくりだしたりする中で、自分が主体的に関わりをもったことだからこそ、そのことを実現させたいという気持ちが出てくることを支えていく。(思いが高まらない子どもを否定しない) その上で、だからこそ友達の意見も自分と関係ある、自分のこととして関心していく経験となるように支える事を大事にする。</p>	
<p>知識や技能を深めたり広げたりすること</p> <p>知識や技能を深めたり広げたりすること</p>	<p>多様な体験をする</p> <p>〇今の遊びや生活を充実させるために、以前やったことを再現しようたり、以前考えたことを思い出したりする。 ⇒思い出せるようにヒントを与えたり、思い出したことを言葉化したり記号化したりしながら、過去が現在につながる援助をする。そして、過去のことが活かされ、現在が豊かになることを、子ども達と共に喜びながら大事にしている。</p>	<p>〇幼児期までの学びをつなぎ、新しい環境(小学校生活)に活かす。 ⇒今までの経験を交流させる中で、子ども達の「～やっただけさ」という思いを引き出し、「～できた」と自信を付けている子ども達に「幼稚園までの経験でこんなことができるの」「すごい」と評価することに関わりを重視する。小学校はこういうものだと教え込むのではなく、幼児期までの学びを活かして「できた」という経験を積み重ねるようになり、子ども達の育ちや学びの中で新しく出会うものがどのように見え、感じられるのかを振り返り、子ども達と話し合ったり「みる」ようにする。</p>	
<p>子どもの思いや願いを大切にすること</p> <p>子どもの思いや願いを大切にすること</p>	<p>幼児期 児童!</p> <p>幼児期 児童!</p>	<p>小学校 児童!</p> <p>小学校 児童!</p>	

図2 三原版幼小接続カリキュラム

る。」や「21 授業で学んだことを他の学習に生かしている。」など、学びの転移を自ら意識して学習をしていることがわかる。これは、光輝の学びを教科の学びに生かすことのできるカリキュラム・マネジメントを行ったり、教科の学びを光輝の学びに生かせるように活動を工夫したりする中で、「知の越境」が起こったものと考えられる。

また、各学年において、エピソード記述を行い、各区分で共有するなどして、子供の成長を見取っている。表4は、幼小接続期（第2学年）の各次元の効果測定とエピソード記述である。担当する教員によって、子供の学びや成長について記述し、共有する機会をもっている。

子供たちの学びのエピソードの中には、幼稚園で学んだことを想起しながら、目の前の活動をよりよくしようとしている子供の姿があった。まさに、知の越境である。

表3 光輝アンケートの項目

1	テストの前には丸暗記をすることがよくある。
2	学んだことに対して、さらに深く考えたり、はっきりさせたりしようとしている。
3	問題に対して、深く考えて解決しようとしている。
4	自分の考えに間違いがないかを確認しながら考えようとしている。
5	パターンや法則を見つけることに興味がある。
6	苦手なことにも取り組み、できるようになろうとしている。
7	自分の成長のために、難しいと感じることにぶつかったことがある。
8	嫌なことや、つらいことも乗り越えたいと考えている。
9	新しいことに挑戦したいと思う。
10	いろいろな視点から自分と向き合おうとしている。
11	いろいろな視点で物事をみようとしている。
12	友達に考えを伝えたり聞いたりしながら、自分自身や自分の生き方についてよく考えている。
13	いろいろな物事の変化に気が付くことが多い。
14	学校で学んでいることと、自分の将来はつながっていると思う。
15	学校生活の中で課題を見つけようとしている。
16	学んだことを、学校生活や普段の生活に生かそうとしている。
17	学校で学んでいることと、自分の日常生活はつながっていると思う。
18	自分の良いところに気付き、将来の夢や目標を持っている。
19	ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことがある。
20	人が困っているときは進んで助けている。
21	授業で学んだことを他の学習に生かしている。
22	地域や社会をよりよくするために何をすべきかを考えることがある。
23	学級みんなで話し合っただけで決めたことなどに協力して取り組み、うれしかったことがある。
24	難しいことでも、失敗を恐れずに挑戦している。

表4 光輝アンケート効果測定とエピソード記述

○幼小接続期（第2学年）		子どもの実態に関連すると思われるエピソード
光輝アンケート数値 【○：特年度の数値との比較】		
運動する喜び 85.3% (+2.3%)		自分たちで大事に育てた稲刈り取った後、風の方で稲わらともみを分けるためのとうみを手作りするようになった。平面的な羽をつないだだけのプロペラをつくったものの、前面に風が吹かずわらを飛ばすことができなかった。その後教室にある扇風機を見て「羽が斜めについている！」との気づきから、羽を折り曲げる改良をしていた。また、幼稚園での風車づくりを思い起こし、羽の際を折り曲げたり、分厚くしたりすることでより強い風を起こせる改良をしていた（横断的）
レゴブロック 86.6% (+2.6%)		
算数的な知識 85.3% (+3.3%)		

さらに、本校校園を卒業した令和4年度卒業生のうちアンケート調査に協力した68名（回答率28%、n=19）の結果を見ると、78.9%が「光輝を通じて多くのことを学べたと思う」という質問項目に対して、肯定的に回答してい

る。さらに、「光輝」で学んだことについての具体的な記述では、「根拠の重要性」「データの活用方法」「研究に説得力をもたせる方法」「関連付けて考えること」、などという考え方や学びに向かう姿勢などを挙げていた。

このような結果から、卒業後も光輝の学習で身に付けたことを生かしながら新たな生活に取り組む子供の姿を見ることができ、知の越境につなげることができたと考える。

（2）教科・領域の越境

①道徳・特別活動・総合的な学習の時間について

光輝は、本来の教育課程としての道徳・特別活動・総合的な学習の時間の3つの教科領域を融合させながら、プロジェクトベースとした学びを軸に、7つの資質・能力を育成するための時間として設置している。プロジェクトを基盤にししながら、探究的な学びを促したり、協働的に学ぶ環境を設定したり、学校外への学びをコーディネートしたりし、自己実現をめざして、人間関係形成や社会参画する中で、道徳的実践力も育成していくことをねらいとした。

カリキュラム・マネジメントをしていく中で、特別の教科道徳については、親和性の高い内容が明らかとなった。特に、A「個人の伸長」、B「友情、信頼」、「相互理解・寛容」、C「よりよい学校生活、集団生活の充実」について、関連が高い傾向が見られた。それは、光輝の特徴である子供の思いや願いを中心としながら、人間関係のつながりを広げたり、経験をつなげたりしていく中で、資質・能力が育まれたものと考えられる。さらに、6年生以降では、D「生命の尊さ」、「よりよく生きる喜び」についても関連させた実践事例が多くあり、道徳的実践力を高めながら、道徳的価値の共有を図っていくことが肝要と考える。

②光輝と各教科について

光輝単元と各教科との関連について、整理を行った。その中で、内容面・方法面の双方を関連させた単元を開発し実践を進めてきた結果、国語科、生活科、音楽科、図工・美術科、体育・保健体育科、外国語活動・外国語科は、自己を表現し他者を受容しながら学ぶ教科として、光輝と関連付けやすいということがわかった。また、本年度の全国学力テストの平均正答率を全国と比較したところ、6年については2教科平均で9.95%、9年については3教科平均で19.5%上回っており、総合的に進めることで学習効果が上がっていることがうかがえた。このことから、教科の学びを光輝の学びと関連させることによって、教科の学習内容の習得を保障し学びを深めることができると考える。

（3）校種間の越境 ～学年区分の検証～

学年区分の妥当性について、3点から分析を行った。

①子供の生活状況（Q-U等）に関連するデータを収集・分析

生活状況(Q-U)については、当該学年を構成する子供の特性による影響が大きく関係していた。一方で、高学年になるにつれ「非承認（認められていないと感じている）」の割合が高くなっていった。それは、転換期を経て自己と他者の違いなどを少しずつ認識し、自立を促されるとともに、

集団や社会の中での自己の存在を考えるなど、学年に応じた発達段階などの傾向も大きく関係している。

②過去4年分の光輝アンケートの比較・分析

過去4年分のアンケート結果を比較したものの、各学年集団の実態等によって数値が変容していた為、学年区分の妥当性を裏付けるものとしては、不十分であった。

③実践を行っている教員から子供の成長や発達の過程や状況を踏まえた上でのアンケート調査の収集・分析

アンケート調査から学年区分ごとに実践を行う上でのねらいの共有の重要性や区分の特徴を意識した単元デザインを行う中で、教員同士のコミュニケーションが重要であることがわかった。また、「幼小接続期」と「小中接続期」の教員については、お互いを受容し協働しようとする意識が高い傾向が見られた。

それらの傾向を踏まえると、校種が変わる際の『接続』を意識する区分をつくることによって、12年間のつながりを意識した一貫教育のよりよい実践につながっていると考える。

(4) 教員間の越境

光輝を実践することで教員にどのような効果をもたらすのかについて、学校園の教員を対象にアンケート調査を実施し、26名(幼稚園4名、小学校13名、中学校9名)が回答した。このアンケート調査では、自己評価・他者評価の観点を取り入れ、教員の変容を分析することとした。

自己評価にかかわっては、「教育観」にかかわる内容について、どの校種も大きな変容が見られた。特に小学校では「子供の姿や発言に学ぶところが多く、その思いや願いを踏まえて単元を作るようになった」などの記述が多くあり、12年間一貫教育研究としての取組の効果が見られた。また、他者評価については、教員の変容について26件の回答中12名の教員の名前が挙げられ、その中でも特に本校に赴任して1・2年目の教員の子供への接し方や各教科への向き合い方についての効果があった。

12年間一貫教育カリキュラムの開発をする中で、幼稚園と小学校、小学校と中学校の「校種間の越境」がスムーズに行われるためには、教員同士のスムーズなコミュニケーションと、子供の育ちを中心にした対話が必要である。このような「教員間の越境」が光輝を研究する上で、非常に有効である。

(5) 保護者・地域への越境

表5は、3校種共通の光輝アンケートの質問項目の結果(9月→1月)である。なお、回答率は、幼稚園が93.4%、小学校が79.0%、中学校が60.8%である。3校種で、わずかな増減はみられるものの、「光輝(かがやき)」や「光輝(かがやき)視点の保育」で育成される資質・能力と関連して、これまでの教育活動の蓄積が反映され、肯定的評価が比較的高いものとなっている。特に、「仲間の気持ちを大切にしようとしている」という項目については、3校種すべてで90%以上となっている。

このように、保護者とも協力し、同じ方向性をもって、

表5 光輝保護者アンケート 幼小中共通事項

光輝(かがやき)保護者アンケート共通項目	幼稚園		小学校		中学校	
	9月	1月	9月	1月	9月	1月
①子どもは、楽しく学校へ行っている。	100%	100%	95.30%	96.00%	89.40%	89.40%
②子どもは、目的を持って登校している。	93.60%	94.80%	85.30%	85.80%	83.70%	82.90%
③学校は、各教科の基礎・基本が身につくような指導を行っている。			100%	98.20%	94.90%	95.60%
④子どもは、学校の課題に粘り強く取り組んでいる。	100%	100%	87.10%	83.50%	83.70%	79.40%
⑤新しい知識や技能を習得して、子どもが成長したと感じる。	98.40%	96.80%	95.40%	94.90%	86.50%	86.50%
⑥子どもが何かに取り組むとき、うまくいかなくても、あきらめずにやり抜こうとしている。	82.50%	82.70%	86.50%	89.20%	87.90%	79.40%
⑦教職員は、子どもの主体性を高めるような授業を行った。	96.80%	94.80%	97.90%	96.60%	82.30%	85.30%
⑧子どもに服装や持ち物等について学校の決まりを守るように話をしている。	98.40%	100%	98.20%	97.00%	67.40%	95.90%
⑨子どもは、立場や意見の異なる他者を理解し、学級のなかまの気持ちを大切にしようとしている。	95.20%	91.30%	98.50%	98.30%	93.60%	95.30%
⑩子どもは、「光輝(かがやき)」の授業を楽しみにしている。	93.70%	96.50%	89.20%	90.50%	73%	67.60%

教育活動、研究活動に取り組んでいる。その結果、保護者をはじめとした様々な視点から、子供の成長を検証することができ、これは越境の多様性をもたらすものである。

5 小括

この研究の目的は、3つの次元を枠組みとした幼小中一貫教育カリキュラムの開発と、7つの資質・能力を育成するための学びのカリキュラム・デザインとマネジメントの提案である。本稿では、「越境学習」を取り上げ、「知の越境」、「教科・領域の越境」、「校種間の越境」、「教員間の越境」に焦点を当てながら、取組の実際とその効果について論じてきた。その中で、「越境」という自分のコンフォートゾーンから、一歩踏み出す挑戦こそ、子供たちの成長を促すことにつながるということが明確になった。それは、特に、レジリエンスを生む学習を企図して環境を設定していくことが非常に重要である。自分の安心できる場所と一歩踏み出して挑戦できる場所の往還によって、生まれる違和感や葛藤が子供の成長を促し豊かな学びをもたらす。

「知の越境」、「教科・領域の越境」、「校種間の越境」、「教員間の越境」さらには、「保護者・地域への越境」は、既知から未知への挑戦であり、その挑戦によって、子供も教員も成長していくことがわかった。さらに、本研究を充実させ、学校教育としての「越境」をめざして、さらに研究に邁進していく所存である。

引用・参考文献

- ・広島大学附属三原幼稚園・小学校・中学校(2023)「文部科学省研究開発学校指定校 研究開発実施報告書 令和4年度【第4年次】」
- ・石山恒貴・伊達洋駆(2022)『越境学習入門』日本能率協会マネジメントセンター、pp.28-30.
- ・C・ファデルら 関口貴裕訳(2016)『21世紀の学習者と教育の4つの次元:知識,スキル,人間性,そしてメタ学習』東京学芸大学次世代教育研究推進機構,北大路書房.
- ・H・リン・エリクソン(2020)『思考する教室をつくる 概念型カリキュラムの理論と実践:不確実な時代を生き抜く力』北大路書房.
- ・石山恒貴(2018)『越境的学習のメカニズム』福村出版

【別紙】

表 1 3つの次元とその基礎となる資質・能力系統表（ステップ1～7）

1 研究開発課題		高度に競争的でグローバル化された多様性社会に適応するために求められる、3つの次元（躍動する感性・レジリエンス・横断的な知識）の基礎となる資質・能力を育成する幼小中一貫教育カリキュラムの研究開発						
2 めざす子ども像について（中学校卒業時）		互いに高め合う環境の中で共創の喜びを感じながら、広い視野から知性を磨き、挑戦する気概をもち続けて、社会の発展に貢献する高い志をもつ子ども						
3 3つの次元について		躍動する感性		レジリエンス			横断的な知識	
次元		＜逆境にさらされても適応し、目標を達成するために再起すること＞						
とらえ		＜習得した知識を実生活等において活用すること＞						
4 3つの次元の基礎となる資質・能力にかかわるチェック項目		ステップ1	ステップ2	ステップ3	ステップ4	ステップ5	ステップ6	ステップ7
	【躍動する感性について】							
	人間味溢れる豊かな感覚	□身近なもののや人とかわる中で、おもしろさや不思議さなどを感じ取っている。 □身近なもののや人とかわる中で、自分とは異なる感じ方があることに気付いている。	□身近なもののや人とかわる中で、おもしろさや不思議さなどを豊かに感じ取っている。 □身近なもののや人とかわる中で、自分とは異なる感じ方があることに気付いている。	□遊びや生活の中で、自分のしたいことを見つけて取り組んでいる。 □遊びや生活の中で、自分のできることを見つけて、取り組もうとしている。	□身近なもののや人とかわる中で、おもしろさや不思議さなどを豊かに感じ取っている。 □身近なもののや人とかわる中で、自分とは異なる感じ方があることに気付いている。	□身近なもののや人とかわる中で、おもしろさや不思議さなどを豊かに感じ取っている。 □身近なもののや人とかわる中で、自分とは異なる感じ方があることに気付いている。	□様々な事象とかわることを通して、おもしろさや不思議さなど豊かに感じ取っている。 □様々な事象とかわることを通して、自分とは異なる感じ方があることに気付いている。	□様々な事象とかわることを通して、新たなことを見付けている。 □様々な事象とかわることを通して、自分とは異なる感じ方があることに気付いている。
	自ら学ぼうとする姿勢	□遊びや生活の中で、自分のしたいことを見つけて、取り組もうとしている。	□遊びや生活の中で、自分のしたいことを見つけて、取り組もうとしている。	□遊びや生活の中で、自分のしたいことを見つけて、取り組もうとしている。	□遊びや生活や授業の中から自分の考えを見つけ直し、前向きに取り組んでいる。	□遊びや生活や授業の中から自分の考えを見つけ直し、前向きに取り組んでいる。	□遊びや生活や授業の中から自分の考えを見つけ直し、前向きに取り組んでいる。	□遊びや生活や授業の中から自分の考えを見つけ直し、前向きに取り組んでいる。
資質・能力								
	【レジリエンスについて】	ステップ1	ステップ2	ステップ3	ステップ4	ステップ5	ステップ6	ステップ7
	粘り強く取り組む力	□自分のしたいことを自分でやろうとしている。	□自分なりの目的に向かって、じっくりとやっている。	□自分の目的に向かって、諦めずにやっている。	□自分が決めた目標に対して、諦めずにやっている。	□自分が決めた目標に対して、継続してやっている。	□自分が決めた目標に対して、継続してやっている。	□自分が決めた目標に対して、継続してやっている。
	コラボレーションする力	□自分の思いを身近な人に伝えながら、一緒に遊んでいる。	□友達と意思を出し合いながら、力を合わせて遊びを進めている。	□友達や遊びの思いに耳を傾け、協力し遊んでいる。	□友達と交流する際に、考えの違いを認めている。 □友達の意見を取り入れながら、協力して取り組んでいる。	□友達と交流する際に、考えの違いを認めている。 □友達と協力して、さらによりよい考えを見つけている。	□友達と話し合い、友達と自分の考えを比べている。 □意見と意見を関係付けて、よりよい考えを導いている。	□友達と話し合い、自分と友達の違いを比べている。 □意見と意見を関係付けて、よりよい考えを導いている。
	複雑性に思考する力	□自分とは異なる考え方にふれている。	□自分とは異なる考え方にふれている。	□自分とは異なる考え方にふれている。	□身近な人の様々な方法や考え方にふれ、異なる考えを受け止めている。	□身近な人の様々な方法や考え方にふれ、異なる考えを受け止めている。	□2つ以上の事実を比べている。 □比較することで、新たなことに気付いている。	□2つ以上の事実を比べている。 □比較することで、対比や類似を行い、関連していることに気付いている。
資質・能力								
	【横断的な知識について】	ステップ1	ステップ2	ステップ3	ステップ4	ステップ5	ステップ6	ステップ7
	知識と知識を関連付けながら追究する力	□今まで経験したことを生かして、遊びや生活に取り入れている。	□今まで経験したことを生かして、課題に対して、経験から新たな気付きを見いだし、自分なりの方法を試している。	□今まで経験したことを生かして、課題に対して、経験から新たな気付きを見いだし、自分なりの方法を試している。	□今まで経験したことを生かして、課題に対して、経験から新たな気付きを見いだし、自分なりの方法を試している。	□今まで経験したことを生かして、課題に対して、経験から新たな気付きを見いだし、自分なりの方法を試している。	□今まで経験したことを生かして、課題に対して、経験から新たな気付きを見いだし、自分なりの方法を試している。	□今まで経験したことを生かして、課題に対して、経験から新たな気付きを見いだし、自分なりの方法を試している。
	論理的に問題を解決する力	□今まで経験したことを生かして、遊びや生活に取り入れている。	□今まで経験したことを生かして、課題に対して、経験から新たな気付きを見いだし、自分なりの方法を試している。	□今まで経験したことを生かして、課題に対して、経験から新たな気付きを見いだし、自分なりの方法を試している。	□今まで経験したことを生かして、課題に対して、経験から新たな気付きを見いだし、自分なりの方法を試している。	□今まで経験したことを生かして、課題に対して、経験から新たな気付きを見いだし、自分なりの方法を試している。	□今まで経験したことを生かして、課題に対して、経験から新たな気付きを見いだし、自分なりの方法を試している。	□今まで経験したことを生かして、課題に対して、経験から新たな気付きを見いだし、自分なりの方法を試している。
資質・能力								

表 2 3つの次元とその基礎となる資質・能力系統表（ステップ8～12）

1 研究開発課題		2 めざす子ども像について（中学校卒業時）		3 3つの次元について	
高度に競争的でグローバル化された多様性社会に適応するために求められる、3つの次元（躍動する感性・レジリエンス・横断的な知識）の基礎となる資質・能力を育成する幼小中一貫教育カリキュラムの研究開発					
互いに高め合う環境の中で共創の喜びを感じながら、広い視野から知性を磨き、挑戦する気概をもち続けて、社会の発展に貢献する高い志をもつ子ども					
次元	躍動する感性	レジリエンス	横断的な知識		
とらえ	<人間味溢れる豊かな感覚を高め、前向きな価値観に基づき行動しようとする>		<習得した知識を実生活等において活用すること>		
4 3つの次元の基礎となる資質・能力にかかわるチェック項目（子どもの姿）	ステップ8	ステップ9	ステップ10	ステップ11	ステップ12
【躍動する感性について】					
人間味溢れる豊かな感覚 未知なものや自分とは異なる考え方に興味・関心をもつことができる。	□自分とは異なる考えや価値観に気付けている。 □自分とは異なる考えや価値観に興味をもってかわっている。	□自分とは異なる考えや価値観を認めている。 □相手の考えや価値観を受け入れている。	□自分とは異なる考えや価値観を認めている。 □相手の考えや価値観を受け入れている。	□自分とは違う考え方をもちた他者の存在を認めている。 □自分のよさを追究している。	□自分とは違う考え方をもちた他者の存在を認めている。 □自分のよさを追究している。
自ら学ぼうとする姿勢 学ぶことに対し、自分で価値を見いだし、意欲的に打ち込むことができる。	□学ぶ目的を考え、学習に意欲的に取り組んでいる。 □課題に対して意欲的に取り組んでいる。	□学ぶことの価値を自覚している。 □自ら見出した問題に対して意欲的に取り組んでいる。	□学ぶことの価値を自ら見いだしている。 □自ら見出した問題に対して意欲的に取り組んでいる。	□自己や集団の目標とする姿を想像し、その実現に向けて自ら進んで探究的学習や課外活動に取り組んでいる。	□自己や集団の目標とする姿を想像し、その実現に向けて自ら進んで探究的学習や課外活動に取り組んでいる。
【レジリエンスについて】					
粘り強く取り組む力 困難な状況においても諦めず続けることができる。	□うまくいかないことに遭遇しても、何度も試行錯誤し、解決に向けて行動している。	□うまくいかないことに遭遇しても、必ずできると信じて試行錯誤し、解決に向けて行動している。	□うまくいかないことに遭遇しても、試行錯誤している。 □何度も試行錯誤する中で問題の改善を図り、解決へ向けて取り組んでいる。	□解決が困難な場合でも、何度も試行錯誤する中で、解決への見通しをもっている。 □何度も試行錯誤する中で改善を図り、問題の解決に向けてより良い方法を見いだしている。	□解決が困難な場合でも、問題に対して積極的にかわっている。 □何度も試行錯誤する中で、解決への見通しをもち、ものごとに対して工夫、改善を図りながら、解決に向けてより良い方法を見いだしている。
コラボレーションする力 公正な態度をもって、価値観の異なる他者と協働することができる。	□他者との対話を通し、相手の気持ちを考えながら意見を聞いている。 □相手の考えを尊重しながら、状況の改善につながる意見を述べている。	□他者との対話を通し、互いの価値観を認め合っている。 □共有した目標に向かって協力して取り組み、合意形成を図っている。	□共有した目標に向かって共同で取り組んでいる。 □責任感をもって自分の役割を果たしている。 □集団で共有した課題を解決している。	□互いの意見や考えの違いを認め合っている。 □それぞれの長所を生かして課題を解決している。 □互いの短所を補い合いながら、課題を解決している。	□互いの意見や考えの違いを認め合っている。 □それぞれの長所を生かして課題を解決している。 □互いの短所を補い合いながら、課題を解決している。
複眼的に思考する力 1つの出来事や事実を多くの異なる視点から見る見方をすることができる。	□事実や出来事に対して複数の立場の人の思いや願いを捉えている。 □自分なりに新たな見方や考え方を思いだしている。	□事実や出来事に対して複数の立場の人の思いや願いを捉えている。 □新たな見方や考え方を思いだし、考えを深めている。	□事実や出来事に対して複数の立場や別の情報を取り入れて考えている。 □新たな見方や考え方を思いだし、よりよい自分の考えをつくっている。	□立場や年代などの違いを踏まえて事実や出来事を捉えている。 □自らの行動の振り返りを行い、これからの自身のあり方に目を向けている。	□時間的・空間的・立体的・状況的な見方で、事実や出来事を柔軟に捉えている。 □行動の結果を自分なりに評価して、行動に生かしている。
【横断的な知識について】					
知識と知識を関連付けながら追究する力 学習したことで学習していることを関連させて考え方を広げ、どこまでも深く調べ明らかにしようとする力ができると。	□教科で学習した知識や技能を広く活用している。 □これまで学んだ見方や考え方を深めたり、新たな考えを導き出したりしている。	□教科で学習した見方や考え方を汎用的に活用している。 □これまで学んだ見方や考え方を深めたり、新たな考えを導き出したりしている。	□教科で学習した見方や考え方を汎用的に活用している。 □これまで学んだ見方や考え方を深めたり、新たな考えを導き出したりしている。	□原理・法則や過去の成功例を別の事象にも応用している。 □収集した情報から共通項を探り、一定の結論を導いている。	□原理・法則や過去の成功例を別の事象にも応用している。 □収集した情報から共通項を探り、一定の結論を導いている。
論理的に問題を解決する力 根拠に基づき、筋道を立てて考え、問題を解決することができる。	□学校生活や授業から解決すべき問題を見つけ、客観的な視点でものごとをとらえている。 □課題に対する解決への道筋を明らかにし、問題解決に取り組んでいる。	□直面した問題について客観的な視点でとらえている。 □他者の助言を生かしながら課題を設定し、解決策を実行している。	□直面した問題について客観的な視点でとらえている。 □他者の助言を生かしながら課題を設定し、解決策を実行している。	□直面した問題について現状の把握と課題の設定を行っている。 □課題解決策の立案と実行、結果の評価と取組の修正をしている。	□直面した問題について現状の把握と課題の設定を行っている。 □課題解決策の立案と実行、結果の評価と取組の修正をしている。